



下二子山 生育地環境調査 足元はハコネコメツツジ。周囲の灌木が迫り風衝地の様を呈さなくなった環境。



観察会等イベントのご案内

冬の野鳥観察会

湖尻周辺の探鳥と自然を楽しむ

日程：二〇二四年二月三日（土）

雨天の場合は翌日に延期、問い合わせは★まで

集合：午前十時 湖尻ビジターセンター駐車場

内容：湖尻周辺の林や草原を散策しながら生息する

冬の野鳥の姿を観察し講師がそれを解説します。オフシーズンの静かな芦ノ湖や箱根の

山々を眺めながら心豊かな一日となります。

対象：比較的平坦なコースですので、大人から子供まで参加可能です。小さなお子さんは大人の方の同伴をお願いします。

参加費：五百円（資料代等）ただし小学生以下の子供は無料です。

持ち物：防寒具（手袋など）筆記具 観察具 水分 昼食（観察会は概ね2、3時間で終了）

第37回 ケンペル・バーニー祭

ケンペルとバーニーを讃えて

日程：二〇二四年四月一四日（日）雨天決行

開催場所：旧東海道石畳道入り口、バーニー碑前

時間：第一部 碑前祭 午前十時より

第二部 記念講演 午前十一時より

元箱根集会所（場所の移動があります）

第三部 懇親会（第二部と同じ会場）

軽食と図録・記念バッチ付き。

概ね午後三時までを予定。

参加費：二千円 但し第一部と第二部迄は無料です。どなたでも参加できます。



上図：祭典を盛り上げるマーチングバンド箱根 21 の皆さん。
下図：碑前に献花する箱幼の園児代表。



★：上記の問い合わせは、左記まで。
箱根を守る会会長：川崎英憲

TEL 0460-85-8355

事務局長 本多まき子 080-6704-2502

芦ノ湖の命の水について

勝俣 正次

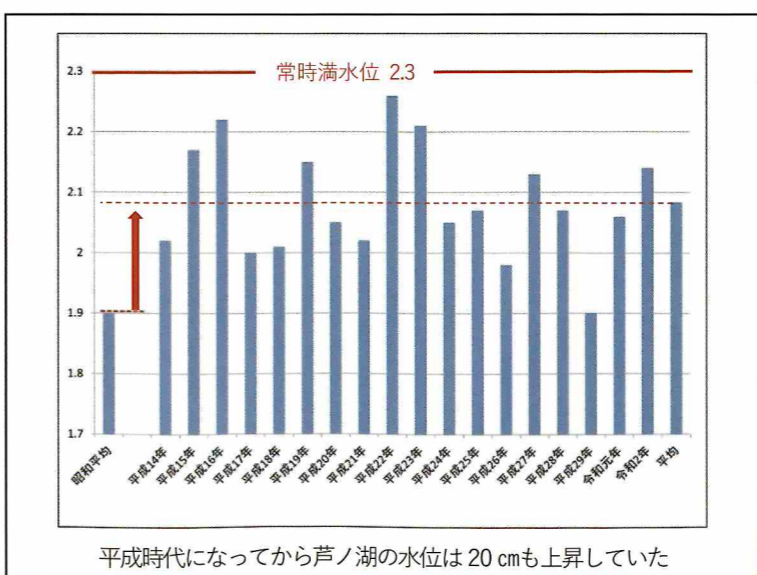
芦ノ湖の水と聞くと、利水に関心のある方ならば静岡県との水争いの歴史を思い浮かべるのではないだろうか？それは芦ノ湖の器は神奈川県のものだが、中身の水は静岡県のものだ」という所謂フェイクニュースをもとにする水利権に関する問題なのだが、今回はそうではなくて防災の観点から芦ノ湖の水問題について述べることにする。



芦ノ湖 溢水 (令和元年10月13日午前8時の箱根町港)

二級河川芦ノ湖は早川水系に属し、河川管理者は河川法で神奈川県知事が管理者と定められている。そしてその河川管理は大別すると、治水、利水、環境保全の三本柱から成り立っている。このたび、その早川の治水に関して神奈川県は向こう三十年間の早川水系河川整備計画を立てようとしているのだが、私は早川の河川整備を計画するにあたっては、芦ノ湖の湖尻水門からのたび重なる放流による浸食被害の影響も考慮すべきであると考えている。つまり早川の防災問題は、イコール芦ノ湖の防災問題でもあると言えるのだ。その考えに至ったひとつの事例として、早川の企業庁仙石原品の木取水堰から入仙橋間における護岸整備があげられる。その現場近くの住民によると、平成時代になつてから早川の護岸浸食が急激に進行し、土地が徐々に削られて行き、護岸工事が完了するまで非常に不安だったと証言している。そこで小田原土木事務所へ問い合わせた結果、昭和六十二年以前の湖尻水門放流回数、年平均一回以下であったのに対して平成時代になると、その数は十倍以上に増加していることが明らかになった。湖尻水門の放流による濁流が平成時代になつてから頻繁に繰り返されるようになれば、水圧を受ける護岸の浸食がそれまで以上に進行するのは当然の結果だったのである。その他の早川流域でも程度の差はあつても、同様な状況が現在でも持続的に進行していると推察される。それでは、いったい何が原因で湖尻水門からの放流回数が、これほどまでに増加したのであるか？神奈川県から入手した昭和四十四年から近年に至るまでの芦ノ湖水位記録から各年の平均水位を算出してグラフ化してみると、昭和時代の平均水位約一・九メートルと比較して平成

時代は二十センチメートルほど高い約二・一メートルに上昇していることが判明したのである。
なおかつ、神奈川県は昭和時代の芦ノ湖の水位をもとにして昭和六十二年に湖尻水門操作規則を作成し、その規則の中に芦ノ湖の日頃の目標水位を二・三メートルとする常時満水位を定めたのである。ところが、この水位設定がその後における芦ノ湖の氾濫や早川の氾濫の原因のひとつになったのである。
その理由は、平成時代になり芦ノ湖の水位が上昇したにもかかわらず、芦ノ湖の目標水位は依然として昭和時代に設定した二・三メートルのままであったため



平成時代になつてから芦ノ湖の水位は20cmも上昇していた

今までよりも高くなった水位を下げられず、芦ノ湖は台風シーズンの洪水期になつても、水位二メートル前後の高水位を保ち続けざるを得なくなつてしまったのである。その結果、芦ノ湖の平素からの水位は昭和時代よりも氾濫危険水位(二・六メートル)に近づいてしまい、芦ノ湖はひとたび大雨が降れば、以前よりも氾濫しやすい湖へと変化し、その影響で芦ノ湖の氾濫を防ぐために湖尻水門からの放流回数が急増したのである。平成時代になつてから早川の護岸浸食が急激に進行するようになった背景にはこうした要因が隠されていたのだ。

なおかつ、神奈川県は令和元年東日本台風災害(台風十九号)を受けて気象庁が発表する台風の進路による予想降水量を算出して危険な場合は、三日前から湖尻水門を事前に放流できるように改めた。これが所謂七十二時間事前放流のことである。ところが、もしもその時に芦ノ湖の水位が常時満水位二・三メートルを維持し、襲来する台風が十九号台風と同規模の台風であったならば、事前放流は三日間では足りずに更に十六時間分の放流が必要であることを神奈川県自身が認めているのである。しかし、それは不可能な話なのである。なぜかと言うと、現在の気象観測の技術では台風進路で予測できる降水量は、三日が限度なのである。このように芦ノ湖の常時満水位二・三メートルの規定は、芦ノ湖と早川の治水を考えるうえで如何に危険な存在であるかがお判りになるだろう。今後、早川水系河川整備計画に携わる者は、このメカニズムとその危険性を真摯に受け止め、持続可能な計画を立てなければならぬ。



令和元年東日本台風災害 (後片付けに追われるボート業者)

また以上の考察から、芦ノ湖と早川における水害の相関関係を分断したもつとで早川水系河川整備をいくらか計画しても根本的な解決には至らず、これからも早川の護岸整備の繰り返しが終始するだけなのは明らかである。近年になつてからの芦ノ湖の水位上昇こそが、芦ノ湖と早川流域における水害発生の主たる要因であることからして、その対策の中心となるのは芦ノ湖の水位を湖尻水門操作規則が定められた当時の水位まで低下させることに帰結する。その決め手と

なる具体的な方策としては、湖尻水門一号ゲートの期間限定放流による洪水制限水位の導入こそ最も有効な手段であると考える。即ち一号ゲートの高さ(敷高)は、昭和時代の平均水位と概ね等しいことから洪水災害が予想される期間(六月〜十月)に限定して湖尻水門一号ゲートをわずかに開放して早川へ湖水を日常的に自然越流させ、芦ノ湖の水位を昭和時代の安全だった水位に近づけるのである。実現できれば、芦ノ湖や早川流域における防災対策は、現在よりも万全なものとなり、環境保全の効果も合わせて期待できるのである。心配される水利権について敢えて申せば、低水位であった昭和時代においてすら静岡県側の持つ既得水利権を侵害したことは一度たりとも無いのである。しかも、この方策は湖尻水門のゲート操作だけで事足りるので特別な予算を必要しないのである。したがって流域治水の考え方からして、残すは河川管理者としての英断を待つばかりなのであるが、現在の地球規模の気候変動を考え合わせれば、その決断は一刻の猶予もないのが実情である。

以上述べたこの芦ノ湖の水位低下の要望は、すでに令和元年東日本台風災害後における箱根町全町民の総意として当時の町長と町議会議長が、河川管理者の神奈川県知事へ提出しているのである。私は、県民の命と財産とも言える治水と環境保全を守ることに、河川管理者の責務として一番大切であり、それ以上に重要なものは存在しないと考えるのであるが如何であろうか？一刻も早い河川管理者の英断を期待したいところである。

本会理事

初めて参加した箱根駒ヶ岳

ハコネコメツツジ生育調査



ハコネコメツツジの生育地を目指す。そこは絶景の風衝地。

中嶋 順

大涌谷の火山活動により平成27年から閉鎖された登山道は静かに時を刻んでいた、人が立ち入ることが無くなった駒ヶ岳から神山に向かう山道の森の

中へ、人が立ち入らなくなったことで、倒木もあり、自然のままに静かな時の中で歩を進めていた。

調査エリアは、駒ヶ岳ロープウェイの駅舎を囲む笹類に覆われた急斜面にあるため、神山に向かう山道を少し進み、道からはずれて腰の高さほどの笹類をかき分け、ハコネコメツツジの生育地を目指す。

目の前には雄大な富士山の眺め、そして眼下には優美な芦ノ湖、この古より変わらぬ景色を眺めながら、さらに笹類をかき分けて斜面を進む。駿河湾からの強い南西の風が当たる風衝地の環境を感じながら先を行くと、点在する大きな岩にへばりつくように力強く生育するハコネコメツツジを確認することができた。標高一三五六m、一年中風衝に晒される環境でやはり風衝に耐えて生育するリョウブやサラサドウダンなどの灌木の間に点在し生育するハコネコメツツジを初めて見た。山頂から望む見事な富士山の眺めを楽しむ観光客の笑い声を風が運ぶ穏やかな情景の一方、風雨雪霧の山頂の厳しい自然環境の中で歳月を刻み懸命に生きる小さなハコネコメツツジ、なんとも感慨深いものがあつた。

駒ヶ岳のハコネコメツツジの群落は、上二子山下二子山、金時山、丹沢山塊など県内では限られた環境に生育する貴重な植物群落で、ハコネコメツツジは絶滅危惧種に指定されている。箱根町はこの種を天然記念物に指定して保護している。

ハコネコメツツジは、年がら年中風があたる他の植物の生育を阻む様な特異な厳しい環境に生育するため、笹類の侵入や灌木の被覆などの少しの環境の変化に対応できない。

この種の生育を保つためには自然環境の変化という

非常に難しい問題を抱えている。箱根を守る会が昨年入山した上・下二子山のハコネコメツツジの生育調査でも確認したこの種の危機的な状況を保護するため、私達は箱根の宝であるこの種とその生育地の保全に対して早急に積極的な取り組みを行うことが求められています。



風衝地の岩場にへばりついて生育しているハコネコメツツジの調査 写真—上妻信夫

芦ノ湖、富士山、南アルプス、駿河湾、相模湾と古から変わることのない雄大な景色を眺望するこの山頂に小さなハコネコメツツジが生育しているこの景観こそ、私達が後世につなぎ大切に守るべきと今回の調査に参加して改めて感じました。

本会理事